

国分寺のむかしむかし

伝承シリーズ その1

～真姿の池～

今号から国分寺市に伝わる伝承、昔話をシリーズでお伝えします。第1回は、西元町一丁目にある「真姿の池」に関わる伝承です。

嘉祥元年（848年）絶世の美女と評判だった玉造小町が業病（重い病）に苦しめられ、治療の効果がなく、日々顔も醜くなっていきました。そこで、武蔵国分寺を訪ね、三七日（21日間）薬師如来に一心に祈ったところ、一人の童子が現れ小町をとある池のほとりに誘い、“この池にて洗うべし”と言って姿を消しました。小町がそのとおり実行したところ、元の美しい姿（真姿）が池に映っていました。このことからこの池はいつしか「真姿の池」と呼ばれるようになったとのことです。〈国分寺市の文化財めぐり より〉



国分寺崖線下の湧水は、古くからこの地に住む人々に飲み水や生活用水を提供し、親しまれてきました。中でも「真姿の池湧水群」は、国分寺崖線の中で代表的な湧水であり、水路沿いの遊歩道も整備され、その景観が訪れる人たちに親しまれています。その真姿の池の側に立つと池の中や周辺からいくつかのきれいな湧水があり、水源となっているのが見えます。環境

の良さを評価され、昭和60年（1985年）に環境庁（現：環境省）の「名水百選」のひとつに選ばれました。また、東京都の名湧水57選にも入っています。

また、真姿の池の中央には、弁財天が祀られていて、雷王石にまつわる伝承があります。武蔵国分寺の教心というお坊さまが、人々の幸せを願い弁天様に毎日祈っていたところ、伊豆国の浦島と名の男が弁天様の使いとしてあらわれました。

「金光明経七の巻にある四雷王の文字を書いて人々に授ければ、雷の災いやいろいろの災難を払うことができる。」と言うと、浦島は部屋を出ていきました。教心が後をつけて行くと、浦島は池のほとりにある弁天様の祠の中に姿を消しました。教心があたりを見回すと、祠の前にある石が光っています。近寄ると石の表面に四雷王の文字が見えました。この石は雷王石と呼ばれ、人々の信仰を集めていましたが、後の世に心ない者が汚したために、池の中に沈んでしまいました。



〈武蔵こくぶんじ むかしむかし より〉